

サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」
(プロジェクト紹介・令和5年度)

日本語・琉球語諸方言におけるアクセント型を数える： N型アクセントと多型アクセントとを区別することはできるか？

五十嵐陽介
(国立国語研究所)

Evidence-based Linguistics Workshop 2023
於国立国語研究所講堂
2023年9月14日(木)

1

【以降、このスペースには実際の発表で話した内容が書かれています】

1. はじめに

「日本・琉球語諸方言における イントネーションの多様性解明のための実証的研究」



3

言語の韻律現象には語レベルのものと文・発話レベルのものがあります。

日本語学では、語レベルの韻律現象をアクセント、発話レベルの韻律現象をイントネーションと呼んで区別します。

本プロジェクトでは、日本語および琉球語諸方言の韻律体系の解明を目指すのですが、特にイントネーションの多様性の解明に焦点を置きます。

日本語の標準語については、アクセントとイントネーションの双方についてたくさんの研究があり、その水準もとても高いものとなっています。

それに対して、一般的に「方言」と呼ばれる、日本語・琉球語の非標準変種については、語レベルの韻律現象については多くの研究があるのに対して、文レベルのイントネーションはほぼ未開拓の研究分野となっています。

日本語・琉球語のアクセント体系は多様性に富むことが明らかにされています。

このことを考慮すると、イントネーション体系にも多様性が認められることが期待できます。

それを明らかにすることは、言語の韻律現象の研究の発展に大きく貢献する可能性があります。

本プロジェクトでは、非標準変種の発話レベルの韻律現象、すなわちイントネーションの解明に焦点を置いて研究を行います。

ただし、語レベルの韻律現象、すなわちアクセントの研究も同時行います。

本発表は主として日本語・琉球語諸方言におけるアクセント体系の多様性の解明に関する研究プロジェクトの紹介を行います。

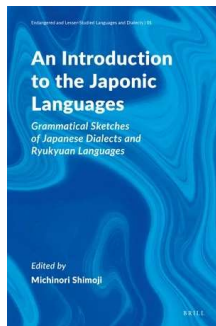
どのように解明するのか？

■ 音声コーパスの構築と分析

- 例えば『広島大学日本語電話会話コーパス』(Igarashi & Hirokawa 2021)の構築と分析

■ フィールドワークを通じて収集したデータの分析

- 日本語・琉球語諸方言の韻律体系スケッチの作成(書籍刊行) ←



Michinori Shimoji (ed.) (2022) *An Introduction to the Japonic Languages: Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages*. Brill.

<https://brill.com/display/title/62978> (2023年9月8日閲覧)

4

日本語・琉球語諸方言の韻律体系の多様性を解明する目的のために本プロジェクトが用いる手法は主として2つです。

1つ目は、諸方言の音声を格納した音声コーパスの構築と分析です。

これについては本発表では扱いません。

2つ目は、フィールドワークを通じてデータを収集し、それを分析する手法です。

この手法を用いて、本プロジェクトでは、日本語・琉球語諸方言の韻律体系をまとめた研究成果を英語書籍として公刊します。

日本語・琉球諸語の文法スケッチについては下地理則(しもし・みちのり)さんが編集した英語書籍が2022年に公刊されてますが、その韻律バージョンを作るのが本プロジェクトの課題のひとつです。

本発表ではこの書籍でどのようなことを行うか、そこではどのようなことが問題とされるのかを論じます。

発表の構成

- 1. はじめに
- 2. 日本語・琉球諸語諸方言の韻律体系スケッチ(書籍刊行)
- 3. アクセント型の対立数を巡る諸問題
- 4. むすび

本発表の構成は以下の通りです。

第2節では、私たちが公刊を目指す日本語・琉球諸語諸方言の韻律体系をまとめた書籍の概要についてお話しします。

第3節では、韻律体系のスケッチを行う際に検討しなければならない諸問題のひとつを論じます。

それはある方言に、対立するアクセント型がいくつあるかという問題です。

最後に発表をむすびます。

2. 日本語・琉球諸語諸方言の 韻律体系スケッチ

日本語・琉球諸語諸方言の韻律体系スケッチ

■ 背景:

- 日本語・琉球語の地域変種の韻律研究は国外にはほとんど知られていない
- 東京方言を対象とした韻律研究からの知見は広く共有されているが、それ以外の地域変種が日本語研究者以外の議論の俎上にあがることはほとんどない

■ なぜか？

- 理由1: 論文が日本語で書かれているから
- 理由2: 日本語学に特有の枠組みが用いられているから

→単に日本語を英語に訳しても海外の研究者には理解されがたい。

7

本プロジェクトでは日本語・琉球語諸方言の韻律体系をまとめた英語書籍の刊行を行います。

こうした書籍を刊行することになった背景には、日本語・琉球語の地域変種の韻律研究は国外にはほとんど知られていないという実情があります。

国外に知られていない理由のひとつは、論文が日本語で書かれているため、日本語を知らない研究者は論文にアクセスできないことにあります。

しかしながら、日本語・琉球諸語の地域変種の研究が海外で知られていない事実は、言語の壁だけでは説明できません。

理由のもう1つは、論文が日本語学に特有の枠組みを用いて書かれていることにあります。

実際に、Google Scholarなどを使って、論文の引用件数を分析すると、同じように英語で書かれている論文であっても、日本語学に特有の枠組みが用いられている論文は、日本の研究者に引用されることは多いですが、海外の研究者に引用されることが少ないという傾向が確認できます。

つまり、単に日本語を英語に訳したとしても、海外の研究者には理解されがたいという問題があります。

そのような論文は、たとえ英語で書かれていたとしても、日本語世界で共有されている知識に依存しているため、その知識を持たない研究者は理解することが出来ません。

日本語・琉球諸語諸方言の韻律体系スケッチ

■ 書名:

- *Word-prosodic systems of Japonic languages* (仮)
(編集委員:五十嵐陽介、セリックケナン、平子達也、青井隼人)

■ 目的:

- 日本語・琉球諸語23変種の韻律体系を**共通の枠組み***で記述し、日本語・琉球諸語の韻律体系の多様性を世界の研究者に知ってもらう。

*共通の枠組み:

- 各章が同じ枠組みで体系を記述する。
- 日本語学に固有の枠組みではなく、多くの言語を対象とした研究で広く用いられている一般言語学的な枠組みを用いる。

このようなことを背景として、本プロジェクトが刊行する書籍の暫定的なタイトルは、*Word-prosodic systems of Japonic languages*です。

編集委員は私と、セリックケナンさん、平子達也さん、青井隼人さんです。

この書籍を刊行する目的は、日本語・琉球諸語23変種の韻律体系を共通の枠組みで記述し、日本語・琉球諸語の韻律体系の多様性を世界の研究者に知ってもらうことにあります。

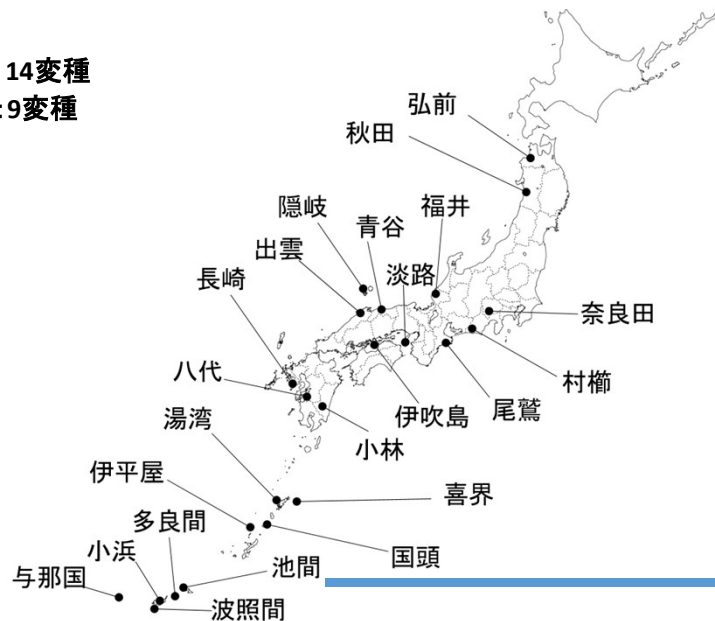
ここで共通の枠組みというのは、本を構成する各章が同じ枠組みで体系を記述するという意味だけでなく、日本語学に固有の枠組みではなく、多くの言語を対象とした研究で広く用いられている一般言語学的な枠組みを用いるという意味もあります。

後者が特に重要です。

対象地域

■ 23地点

- 日本語：14変種
- 琉球諸語：9変種



9

記述の対象となる言語変種の話されている地点はこの地図に示された23地点です。その内訳は、日本語が14変種、琉球諸語が9変種です。それぞれの地域をフィールドとしているプロジェクトの共同研究員が、それぞれの地域の変種の韻律体系を記述します。書籍では、1地域につき一章が割かれます。

各章の構成

- 1. Introduction
 - 1.1 Location
 - 1.2 Speakers
 - 1.3 Classification
 - 1.4 Previous studies
 - 1.5 Data
 - 1.6 Overview of the segmental phonology
 - 2. Word-prosodic system
 - 2.1 Classification based on Uwano (1989, 1999)
 - 2.2 Number and nature of tonal contrasts
 - 2.3 Domain of word-level tone assignments
 - 2.3 Domain of word-level tone assignments
 - 2.6 Obligatoriness and culminativity (Hyman 2006)
 - 2.7 Prosodic compound rules
 - 2.8 Merger and split of the proto-Japonic/ proto-Ryukyuan tonal classes
 - 3. Detailed description of the prosodic system
 - 4. Phrase-level prosody
 - References
- ← 「N型アクセント」「多型アクセント」の分類
← 対立するアクセント型の数

10

この書籍では、すべての言語変種がここに挙げた章立てに沿って記述されます。

本発表ではこれ以降、韻律体系を共通の枠組みで記述する際に問題となりうる点の1つを論じていきます。

それは、ある変種において、対立するアクセント型はいくつあるのかという問題に関連するものです。

本書籍では、その変種で対立するアクセント型の数を報告します。

しかしながら、アクセント型の数を数えるというのは、それほど単純な仕事ではありません。

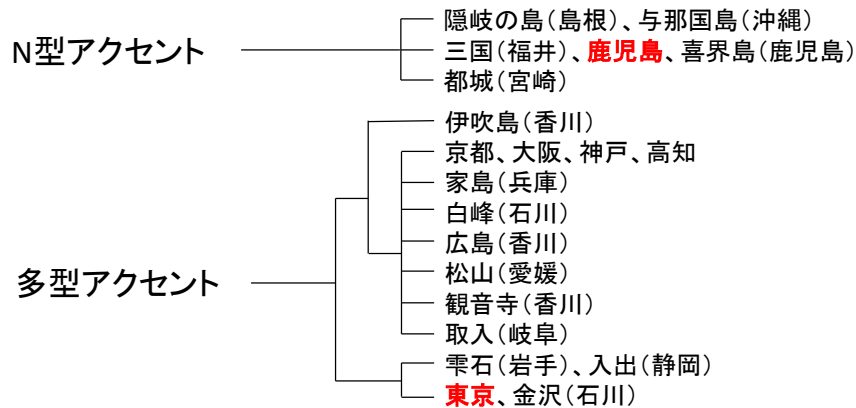
また、アクセント型の対立数を決定することは、日本語学で極めて影響力のある研究における、「N型アクセント体系」と「多型アクセント体系」の分類と関わります。

以降、アクセント型の対立数を巡る問題について論じます。

3. アクセント型の対立数を巡る諸問題

「N型アクセント」と「多型アクセント」(上野1989, Uwano 2012)

- **N型アクセント**: 単位の長さが増えても対立数が一定数(N)を超えて増えないタイプ
- **多型アクセント**: 単位の長さが長くなるに応じてアクセントの対立数も増えるタイプ



12

日本語学で非常に影響力のある枠組みでは、日本語・琉球語の韻律体系が「N型アクセント」と「多型アクセント」とに分類されます。

この「N型アクセント」と「多型アクセント」の二分法は、アクセント型の対立数に関連した分類です。

それぞれは以下のように定義されています。すなわち、

N型アクセントとは、単位の長さが増えても対立数が一定数(N)を超えて増えないタイプであり、

多型アクセントとは、単位の長さが長くなるに応じてアクセント型の対立数も増えるタイプです。

N型アクセントの代表例としては鹿児島方言を、多型アクセントの代表例としては東京方言を挙げることができます。

「N型アクセント」と「多型アクセント」

■冗長 (redundant) な定義:

- N型アクセント: 単位の長さが増えても対立数が一定数(N)を超えて増えないタイプ
- 多型アクセント: 単位の長さが長くなるに応じてアクセントの対立数も増えるタイプ

基準1

「長さが増えても...増えない」(N型) 対 「長くなるに応じて...増える」(多型)
→対立数の増加が語の長さに依存しないか(N型)かする(多型)か。

基準2

「一定数を超えて...増えない」(N型) 対 「長くなるに応じて...増える」(多型)
→対立数の増加に上限があるか(N型)かない(多型)か。

	基準1(長さへの依存)	基準2(増加の上限)
N型アクセント		✓
多型アクセント	✓	

13

N型アクセントと多型アクセントというカテゴリーは、これまで冗長な形で定義されてきたということ指摘する必要があります。

それは、変種を2つのカテゴリーに分類するならば、1つのバイナリーなパラメータを用いれば十分であるにもかかわらず、2つのバイナリーパラメータが用いられていることです。

1つ目は、「長さが増えても...増えない」「長くなるに応じて...増える」という形で表現されているパラメータであり、それはすなわち、対立数の増加が語の長さに依存するかしないかというパラメータです。

N型アクセントは長さに依存せず、多型アクセントは長さに依存するということになります。

2つ目は、「一定数を超えて...増えない」、「長くなるに応じて...増える」という形で表現されているパラメータであり、それはすなわち、対立数の増加に上限があるかかないかというパラメータです。

N型アクセントには上限があり、多型アクセントには上限がないということになります。

下の表で表したように、2つのパラメータの値は相補的に分布しており、どちらか一方のパラメータは本来は不要であることが示唆されます。

N型アクセント

■ 鹿児島方言 (Uwano 2012)

- 語の長さへの依存: なし
- 増加の上限: あり(2種まで)

	A型	B型
1音節語 2種	[●] [ハ] 葉	[●] [ハ 齒
2音節語 2種	[●]○ [カ]ゼ 風	○[●] ヤ[マ 山
3音節語 2種	○[●]○ サ[カ]ナ 魚	○○[●] オト[コ 男
4音節語 2種	○○[●]○ ハタ[バ]コ 葉煙草	○○○[●] ハグル[マ 齒車

●	高い単位
○	低い単位
[単位間上昇
]	単位間下降
]]	単位内下降

14

対立数の、語の長さへの依存と増加の上限について、N型アクセント、多型アクセントにそれぞれ分類されてきた体系を検討してみましょう。

まずはN型アクセントに分類されてきた鹿児島方言です。

鹿児島方言は、A型B型と呼ばれる2種類のアクセント型があり、語の長さに拘わらずA型、B型が現れます。

つまり、対立数は語の長さに依存しません。対立数の増加には上限があり、それは2です。

多型アクセント

■ 東京方言 (上野 1989)

- 語の長さへの依存: あり
- 増加の上限: なし(?)

	0型	1型	2型	3型	4型
1モーラ語 2種	[●] [エ 柄	[●] [エ 絵			
2モーラ語 3種	○[●] カ[ゼ 風	[●]○ [ソ]ラ 空	○[●] ヤ[マ] 山		
3モーラ語 4種	○[●●] サ[カナ 魚	[●]○○ [イ]ノチ 命	○[●]○ ソバヤ 蕎麦屋	○[●●] オ[トコ] 男	
4モーラ語 5種	○[●●●] ニ[ワトリ 鶏	[●]○○○ [カ]マキリ 蟻螂	○[●]○○ ム[ラ]サキ 紫	○[●●]○ カ[ラカ]サ 唐笠	○[●●●] オ[トート] 弟

対立数増加 (赤い矢印で示されています)

15

次に、多型アクセントに分類されてきた東京方言です。

東京方言には1モーラ語に2種類、2モーラ語に3種類、3モーラ語に4種類、4モーラ語に5種類のアクセント型があるとされてきました。

つまり、対立数は語の長さ依存して増加してきます。

対立数の増加の上限については、この分析では不明ですが、特に証拠がなければ、増加を続けていくことが予測されるので、上限はないと考えられてきたとみなしてよいでしょう。

対立数が語の長さに依存するN型アクセント

■ 杵島方言 (平子・五十嵐2016)

- 語の長さへの依存: **あり**
- 増加の上限: **あり(2種まで)**

	A型	B型
1モーラ語 1種	[●] [ハ] 葉	
2モーラ語 2種	[●]○ [ハ]ナ 鼻	○[●] ハ[ナ] 花
3モーラ語 2種	○[●]○ [イ]ワシ 鯛	○[●●] ア[タマ] 頭
4モーラ語 2種	[●]○○○ [モ]スクワ モスクワ	○[●●●] プ[ラジル] ブラジル

対立数増加

16

このように多型アクセントは、N型アクセントとは異なり、対立数が語の長さに依存するとみなされていますが、これには問題があります。

N型アクセントに分類されてきた杵島方言を例に取ります。

杵島方言は、同じくN型アクセントに分類される鹿児島方言と同様に、A型B型と呼ばれる2種類のアクセント型があります。

しかしながら鹿児島方言とは異なり、語が最も短い場合、すなわち1モーラの場合、1種類のアクセント型しか現れません。2モーラ以降は2種類のアクセント型が現れます。このことは、杵島方言では、語の長さに依存して、対立数が増加することを意味します。

「N型アクセント」と「多型アクセント」

■ N型と多型の本質的な違い：「対立数の上限の有無」

- N型: 上限あり
- 多型: 上限なし

基準1 → ~~対立数の増加が語の長さ~~に依存しないか(N型)かする(多型)か。

基準2 → 対立数の増加に上限があるか(N型)かない(多型)か。

	基準1(長さへの依存)	基準2(増加の上限)
N型アクセント	=	✓
多型アクセント	≠	

17

2種類のパラメータを用いて杵島方言を分類すると、杵島方言はN型でも多型でもない第3の категорияということになります。

この解釈を取らずに、もしN型と多型という二分法を維持して、杵島方言をN型アクセントに分類するのであれば、「対立数の、語の長さへの依存」というパラメータを取り除く必要があります。

ここでは、N型と多型という二分法を維持したうえで、「語の長さへの依存」というパラメータを取り除き、N型と多型の間の本質的な違いは、対立数の上限の有無にあるとみなすことにします。

N型には上限があり、多型にはないことになります。

多型アクセントにおける対立数の上限の有無

■ 多型アクセントの型の対立数は語が長くなるに応じて際限なく増えていくのか？

- 型の数を数えるためには、語の音節と構造語形成(形態素境界の有無と位置)を考慮する必要がある。
- もしある「型」と別の「型」が相補的に分布していれば、それら是对立しない。
- 従来の研究では、音節構造と語形成が十分に考慮されていない。

■ ※加えて「品詞」の違いも考慮する必要がある。以下の議論は名詞に限定します。

18

次に検討しなければならない問いは、多型アクセントに分類されてきた体系には本当に対立数の上限がないのかという問いです。

言い換えれば、多型アクセント体系では、本当に、アクセント型の対立数は語の長さが長くなるに応じて、際限なく増えていくのかという問いです。

ここで重要となるのが、対立するアクセント型の数え方です。

音韻論の定石として、ある音と別の音とが対立するかどうかを検討するためには、同一の環境下において音の違いが観察されるかどうかを検討しなければなりません。

アクセント型の場合、音節構造、および語の語形成、つまり形態素境界の有無と位置を考慮する必要があります。

もしある「型」と別の「型」が同一の環境に現れず、相補的に分布していれば、それら是对立しないとみなすことができます。

従来の研究では、音節構造と語形成が十分に考慮されていないという問題があります。音節構造と語形性のほかに品詞の違いも考慮する必要があります。以下の議論は名詞に限定します。

以降、音節構造と語形成の効果をそれぞれ検討していきます。

音節構造の違いの効果

- 4モーラ語「4型」の名詞「弟」は第3モーラが長音(=第2音節が重音節)

東京方言(多型)

	0型	1型	2型	3型	4型
1モーラ語 2種	[●] [エ] 柄	[●] [エ] 絵			
2モーラ語 3種	○[●] カ[ゼ] 風	[●]○ [ソ]ラ 空	○[●] ヤ[マ] 山		
3モーラ語 4種	○[●●] サ[カナ] 魚	[●]○○ [イ]ノチ 命	○[●]○ ソバヤ 蕎麦屋	○[●●] オ[トコ] 男	
4モーラ語 5種	○[●●●] ニ[ワトリ] 鶏	[●]○○○ [カ]マキリ 蠅螂	○[●]○○ ム[ラ]サキ 紫	○[●●●]○ カ[ラカ]サ 唐笠	○[●●●●] オ[トート] 弟

対立数増加 (赤い矢印で示される)

19

まずは、音節構造です。

東京方言は多型アクセントに分類されますが、この方言が多型アクセントであることを示す議論には、4モーラ語に、専ら、「弟」あるいは「妹」という語が用いられるという興味深い事実があります。

「弟」「妹」は第3モーラが長音、つまり第2音節が重音節です。それに対して、例示に使われる他の語は、すべてが軽音節です。

音節構造の違いの効果

- 東京方言の4モーラ名詞の型の例にはもっぱら「弟」あるいは「妹」が用いられる。
 - 第3モーラに長音(第2音節が重音節)。他の例はすべて軽音節。

上野(2012: 181)

	0型	1型	2型	3型	4型
4モーラ語 5種	○[●●●] ニ[ワトリ] 鶏	[●]○○○ [カ]マキリ 蟻螂	○[●]○○ ム[ラ]サキ 紫	○[●●]○ カ[ラカ]サ 唐笠	○[●●●] オ[トー]ト 弟

秋永一枝(編)(1997)『新明解アクセント辞典』三省堂(p. 19)

	0型	1型	2型	3型	4型
4モーラ語 5種	○[●●●] ト[モ]ダチ 友達	[●]○○○ [フ]ジサン 富士山	○[●]○○ ウ[グ]イス 鶯	○[●●]○ ミ[ズウ]ミ 湖	○[●●●] イ[モ-]ト 妹

斎藤純男(1997)『日本語音声学入門』三省堂(p. 22)

	0型	1型	2型	3型	4型
4モーラ語 5種	○[●●●] ヤ[キ]トリ 焼き鳥	[●]○○○ [ラ-]メン ラーメン	○[●]○○ オ[ニ]ギリ 御握り	○[●●]○ ミ[ソシ]ル 味噌汁	○[●●●] オ[ト-]ト 弟

松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古(編著)(2012)『日本語アクセント入門』三省堂(p. 22)

	0型	1型	2型	3型	4型
4モーラ語 5種	○[●●●] ア[メ]リカ	[●]○○○ [コ]スモス	○[●]○○ ウ[グ]イス 鶯	○[●●]○ ア[オソ]ラ 青空	○[●●●] イ[モ-]ト 妹

※平山輝男(編)(1960)『全国アクセント辞典』東京堂(p. 12)も同様。

20

このスライドには、手元にあった東京方言に関する先行研究5つを挙げていますが、東京方言の4モーラ語のアクセント型の例示にもっぱら「弟」「妹」が用いられることが確認できます。

つまり、どの先行研究でも、4モーラ語の例示において、音節構造が統一されていません。

このことは対立するアクセント型の数を数えるのには問題となります。

音節構造の違いの効果

■ 沖縄語今帰仁方言 (仲宗根2011)

- 表面的には4モーラ名詞に6種類の型があるように見える。
- しかし音節構造が揃っていない。

	【●】○○○	○【●】○○	○○【●】○	○○○【●】	【●●】○○	○【●●】○
4モーラ名詞 6種?	[ウ]スクブ 「後頭部の尖ったところ」	トゥ【ぱ】シリ 「雨戸」	ヒてい【ミ】てい 「朝」	タムー【ヌ】 「薪」	【きー】ムシ 「毛虫」	ア【くー】ビ 「欠伸」

音節構造を考慮しないと、対立するアクセント型の数を正しく数えられないということを示すために、沖縄語今帰仁方言を例に取ります。

今帰仁方言では、4モーラ語に6種類の型があるように表面的には見えます。

しかしよく見てみると、軽音節のみからなる語と、タムーヌ、キームシ、アクービのように重音節をどこかに含む語とが混在していることがわかります。

アクセント型の数を数えるには音節構造をそろえる必要があります。

音節構造の違いの効果

■ 沖縄語今帰仁方言(仲宗根2011)

- 音節構造のタイプごとに見ると最大で3種類であることがわかる。
- 今帰仁方言は対立数が3のN型アクセント(三型アクセント)。

	[●]○○○	○[●]○○	○○[●]○	○○○[●]	[●●]○○	○[●●]○	○○[●●]
○○○○ 3種	[ウ]スクブ 「後頭部の尖ったところ」	トゥ[ぱ]シリ 「雨戸」	ハギ[ブ]シ 「陰干し」	×	×	×	×
○ー○ 2種	×	×	×	タムー[ヌ] 「薪」	×	ア[くー]ビ 「欠伸」	×
○ー○ー 3種	×	×	サー[夕ー] 「砂糖」×	×	[ちー]パー 「牙」	×	ハー[ミー] 「亀」
○ー○○ 2種	×	×	ソー[ガ]チ 「正月」	×	[きー]ムシ 「毛虫」	×	×
○○○ー 3種	[ウ]ブユー 「産湯」	×	フとぅ[ゲー] 「頤」	×	×	×	イヌ[ちー] 「命」

22

音節構造のタイプごとにアクセント型をまとめたのがこの表です。

この表から、同一の音節構造においては、最大で3種類の型しか観察されないことがわかります。

例えばタムーヌやアクービという型は、第3モーラが長音、つまり第2音節が重音節の時にしか現れず、他の型と相補分布しています。

以上から、今帰仁方言の対立する型の数は6であるというのは誤りであり、対立する型の数は3であることがわかります。

音節構造の違いの効果

- 東京方言における第3モーラが長音(第2音節が重音節)の4モーラ名詞の型
 - この環境でも5種類の型が見つければ5種類の型が対立する。
 - しかし4種類しかない。

	0型	1型	2型	3型	4型
○○ー○ 3種	○[●●●] ヨ[ホーヤ] 予報屋	[●]○○○ [シ]ロート 素人	○[●]○○ ワ[コ]ード 若人	○[●●]○ ×	○[●●●] オ[トー]ト 妹

23

東京方言の4モーラ語の話に戻しましょう。

4モーラ語におけるアクセント型の例としては、従来、「弟」や「妹」といった第3モーラが長音である語、つまり第2音節が重音節の語がもっぱら用いられてきました。

このような語を用いて、4モーラ語に5種類の型があると主張するためには、同様の音節構造を持つ語において、5種類の型が観察されることを示さなければなりません。

しかしながらこの音節構造では、表中で「3型」と呼んでいる型が欠如しており、4種類の型しか観察されません。

従来例示の仕方では、東京方言の4モーラ語に5種類の型が対立することを証明できません。

形態素境界の有無と位置の違いの効果

- 東京方言におけるすべて軽音節の4モーラ名詞(4音節4モーラ名詞)の型
 - 5種類の型が観察される
 - しかし語形成(形態素境界の有無と位置)が異なる。

	0型	1型	2型	3型	4型
4モーラ語 5種	○[●●●●] ニ[ワトリ 鶏(庭+鳥?)	[●]○○○ [カ]マキリ 螞螂(鎌+?)	○[●]○○ ム[ラ]サキ 紫	○[●●]○ カ[ラ+カ]サ 唐+笠	○[●●●●] ア[キタ+シヨ] 秋田+署

24

では、軽音節のみからなる4モーラ語に限定して型の数を数えるとどうなるでしょう。「弟」の代わりに「秋田署」を用いると、軽音節のみからなる4モーラ語には5種類の型が観察されることがわかります。しかし、これでもまだ、東京方言の4モーラ語には5種類の型が対立すると結論づけることはできません。語形成、具体的には形態素境界の有無と位置が考慮されていないからです。例えば、「唐笠」と「秋田署」は明らかな複合語であり、語内部に形態素境界があります。それに対して、「紫」は共時態においては単純語と分析できます。「鶏」と「螞螂」は語源を遡れば複合語ですが、共時態において複合語であるか否かがは議論が分かれるところでしょう。いずれにせよ、形態素境界の有無と位置とは、アクセント型に影響を与える可能性があるため、そろえる必要があります。以下、語形成の効果について検討します。

形態素境界の有無と位置の違いの効果

■ 宮古語池間方言(仲間他2021)

- 表面的には、6モーラ語に6種類の型が観察される
- しかし語形成(形態素境界の数と位置)が異なる。

	○[●●]○○○○○	○[●●●]○○○○	○[●●●●]○○	○[●]○○○○○[●]○	○[●]○○○[●]○○	○[●●]○○○[●]○
○○○○○○=○○ 6種?	ア[マタ]スカマ=カラ 余計な仕事=から	ガ[パウイ]ビトゥ=カラ 老人=から	マ[クブナマス]=カラ 羊の葉の和え物=から	カ[ディ]フツアミ=カラ 台風の前兆の雨=から	ヤ[マ]ガラカ[ジャ]=カラ 野生動物の臭い=から	ホウ[リギ]チクラ=[カラ] 馬鹿な奴=から

25

形態素境界の有無と位置とがアクセント型に影響を与えることを示すために、宮古語池間方言の例を検討します。

表は、池間方言の6モーラ語に2モーラ助詞カラがついた例です。

6モーラ語には表面的には6種類の型が観察されます。

しかし、この事実から池間方言では6種類の型が対立すると結論することはできません。なぜなら形態素境界の数と位置が揃っていないからです。

形態素境界の有無と位置の違いの効果

■ 宮古語池間方言 (仲間他2021)

- 語形成のタイプごとに見ると相補分布が観察される。
- 同一の条件で現れる型の数は3。
- 対立するアクセント型の数は3であって6ではない。
 - 対立数が3のN型アクセント (三型アクセント) (五十嵐他2012; Igarashi et al. 2018)

	○●●○○○○○	○●●●○○○○	○●●●●○○○	○●○○○○○●○	○●○○○●○○○	○●●○○○●○
○○+○○+○○=○○ 3種		ガ[バ+ウイ]+ビトウ=カラ 老人=から	x	カ[テイ]+フツ+アミ=[カ]ラ 台風の前兆の雨=から	ヤ[マ]+ガラ+カ[ジャ]=カラ 野生動物の臭い=から	x
○○○+○○○=○○○ 3種	ア[マタ]+スカマ=カラ 余計な仕事=から	x	マ[クブ]+ナマス]=カラ 羊の葉の和え物=から	x	x	ホウ[リギ]+チクラ=[カ]ラ 馬鹿な奴=から

26

そこで語形成ごとにまとめて型の数を検討してみると、完全な相補分布が観察されることが明らかになります。
 同一の環境で現れる型は3つしかありません。
 したがって、池間方言において対立するアクセント型の数は3であって6ではありません。
 池間方言は対立数が3のN型アクセント、すなわち三型アクセントです。

形態素境界の有無と位置の違いの効果

■ 東京方言におけるすべて軽音節の4モーラ名詞の型

- 単純名詞では3~4種類の型しかない。
- 多形態素名詞(複合語+派生語)では最大5種類の型

※東京方言の型は以下の文献を参考とした。
平山(編)(1960)、秋永(編)(1997)、
上野(1997)

4モーラ語(軽音節)

動詞転成名詞

	0型	1型	2型	3型	4型
	○[●●●●]	[●]○○○	○[●]○○	○[●●]○	○[●●●]
○○○○ 4種	ア[メリカ] アメリカ	[コ]スモス コスモス	ム[ラ]サキ 紫	イ[ノシ]シ 猪	ア[ツマリ] 集まり
○+○○○ 2種	オ-[コ]ミ 御好み	×	ハ+[ザ]クラ 葉桜	?	×
○○+○○ 5種	ミ[ズ]+ムシ 水虫	[マ]チ+バリ 待ち針	カ[メ]+ムシ 亀虫	ア[オ+ゾ]ラ 青空	ロ[ク-チャク] 六着
○○○+○ 5種	ロ[シア+ゴ] ロシア語	[ハ]カセ-ラ 博士ら	オ[ト]メ-ラ 乙女ら	ク[グリ]+ド 潜り戸	ア[キタ+シヨ] 秋田署

27

それでは再び東京方言に戻って、語形成ごとに4モーラ名詞のアクセント型を検討しましょう。

まず形態素境界の無い単純名詞を検討しましょう。

このうち、イノシシは共時態においても複合語と分析されている可能性があります、単純語として分析しています。

音節構造をそろえても、4モーラ単純名詞には5種のアクセント型が認められます。

しかし、この表で「4型」と呼んでいる型を埋めるのは、私の分析では、動詞から派生した名詞、いわゆる動詞転成名詞に限られるようです。

動詞転成名詞を動詞ととらえるか名詞ととらえるかによって分析結果が変わってきます。これについては後で詳しく論じます。

次に、形態素境界を含む名詞、多形態素名詞を検討しましょう。

語形成によっては空き間が出てきますが、いずれにせよ、多形態素語にも5種類のアクセント型が観察されます。

形態素境界の有無と位置の違いの効果

■東京方言におけるすべて軽音節の5モーラ名詞の型

- 単純名詞では3~4種類の型しかない。
- 多形態素名詞(複合語+派生語)では最大5種類の型

5モーラ語(軽音節)

	0型	1型	2型	3型	4型	5型
	○[●●●●]	[●]○○○○	○[●]○○○	○[●●]○○	○[●●●]○	○[●●●●]
○○○○○ 4種	ス[ロベニア スロベニア]	[ファ]クシミリ ファクシミリ	ス[タ]ジアム スタジアム	ク[リス]マス クリスマス	×?	ハ[ズカシメ] 辱め
○+○○○○ 3種?	オ-[トモ]ダチ お友達	×?	コ+[カ]マキリ 子蠅螂	コ+[ムラ]サキ 小紫	×?	×?
○○+○○○ 5種	ミ[ズ+ブ]クレ 水膨れ	[モ]ノ+グラフ モノグラフ	ヒ[ト]+ヤスミ ヒトヤスミ	ヤ[マ+ザ]クラ 山桜	ナ[マ+タマ]ゴ 生卵	(コ[メ+ドコロ]) (米所)
○○○+○○ 5種	ト[ナリ+ム]ラ 隣村	[マ]ツコ-サマ 松子様	ア[ナ]ター-サマ 貴方様	ミ[ダレ]+ガミ 乱れ髪	タ[カラ+ブ]ネ 宝船	(ヒ[サシ+ブリ]) (久し振り)
○○○○+○ 6種	イ[タリア+ゴ] イタリア語	[カ]スペル-シ カスペル氏	イ[ガ]ラシ-ラ 五十嵐ら	イ[ノシ]シ-ラ 猪ら	ヒ[ロシマ]+シ 広島市	カ[ゴシマ+シヨ] 鹿児島署

動詞転成名詞

28

続いて5モーラ名詞のアクセント型を検討しましょう。

単純名詞は、この表で「4型」と呼ぶ型を欠いているため、最大で5種類のアクセント型しか認められません。

さらに「5型」と呼んでいる型は動詞転成名詞に限られている可能性が高いです。動詞転成名詞を名詞とみなさなければ、単純名詞におけるアクセント型の数は4ということになります。動詞転成名詞については後で論じます。

いずれにせよ、単純名詞に関する限り、型の数の増加がすでに飽和して上限に達していることがわかります。

すなわち、東京方言の単純名詞には、多型アクセントと分類されているにも拘わらず、アクセント型の増加の上限があることとなります。

一方、多形態素名詞では、最大で6種類の型が認められます。

単純名詞では、3モーラあるいは4モーラ名詞の時点で型の増加の上限に達しているのに対して、多形態素名詞では、5モーラ語の時点でも型の増加が停止していないと言えます。

一方で、6モーラ以上になった場合、型の増加が停止することを予測させる事実があります。

それは5モーラのような長い語では「語」「ら」「市」「署」のような限られた形態素を利用して空き間が埋められている事実です。

形態素境界の有無と位置の違いの効果

■長い名詞は生産的な規則によって派生される型が枠を埋める

- 「語」「氏」「ら」「市」「署」等を伴う複合語・派生語がアクセント型の枠を埋めている。
- 「氏」「ら」は前部要素のアクセント型を変えずに接続するので型の増加に貢献している。
- しかし単純名詞のアクセント型の数が3モーラの時点で飽和していることを考慮すれば、多形態素名詞であっても、6モーラ以上で上限に達するはず。

単純名詞 ○[○○○]○ がないので、○[○○○]○らもない。

6モーラ語(軽音節)

	0型	1型	2型	3型	4型	5型	6型
	○ ●●●●●	[●]○○○○○	○ ● ○○○○○	○ ●● ○○○	○ ●●● ○○	○ ●●●● ○	○ ●●●●●
○○○○+○ 6種	バ[ルセロナ+ゴ] バルセロナ語	[ファ]クシミリーシ ファクシミリ氏	マ[テ]リアルーシ マテリアル氏	ゲ[ラシ]モフーラ ゲラシモフら	*	ブ[ラジリア]+シ ブラジリア市	マ[ケドニア+シヨ] マケドニア署

29

これらの形態素は、生産的な規則によって多形態素語の型を派生する形態素です。つまり長い多形態素名詞においては、生産的な規則によって派生された型が、空き間を埋めています。

このなかでも「氏」と「ら」は前部要素の型を変えずに接続するという特徴を持っていて、型の増加に貢献していることが注目されます。

なぜならば、単純名詞のアクセント型の数が、動詞転成名詞を除けば4種類で、動詞転成名詞を入れても5種類で上限に達していることを考慮すれば、これらの形態素を用いても、6モーラ名詞の空き間を埋めることができないからです。

下の表に示したように、6モーラ名詞で「4型」と呼んでいる型は、このような形態素を用いても埋めることはできないでしょう。

したがって多形態素名詞であっても型に上限があると言ってよいと思われます。

形態素境界の有無と位置の違いの効果

■ 生産的な規則で派生された型は対立するとみなせるか？

- Labov (1994: 351)による「対立」の定義
 - a. 2つの型の違いが、意味の違う発話間の唯一の違いであるような環境が少なくとも1つある。
 - b. **2つの型の分布がいかなる一般的な規則からも予測できない。**
 - c. ある行動レベルにおいて、母語話者が、同一の型のトークンの違いには敏感ではないが、2つの型の違いには敏感である。
- 生産的な規則で派生されたアクセント型は予測可能なので対立しない。
- 生産的な規則で派生された型で枠が埋まったとしても、対立数が増加しているとはみなせない。

- 語の長さに応じた対立数の増加は単純名詞のみに基づいて検討すべき。

30

そして、そもそも生産的な規則で派生された型は対立する型とみなせるかという問題があります。

Labovによると、ある型と別の型が「対立」しているとみなせるのは、ここに示したaからcまでの三つの条件を満たしているときに限られます。

そのうちbは、2つの型の分布がいかなる一般的な規則からも予測できないというものであり、生産的な規則によって派生された多形態素名詞の型はこれを満たしません。Labovに従えば、生産的な規則で派生された型は予測可能なので対立するとはみなされません。

そのような型で枠が埋まったとしても、対立数が増加しているとはみなすことはできないということになります。

したがって、語の長さに応じた対立数の増加は単純名詞のみに基づいて検討すべきであるということが出来ます。

形態素境界の有無と位置の違いの効果

■ 動詞転成名詞の型は他と対立する型か？

■ 動詞転成名詞の型

■ ヌ[ル 「塗る」(動詞)	→	ヌ[リ 「塗り」(名詞)		ヨ[ム 「読む」(動詞)	→	ヨ[ミ 「読み」(名詞)
■ マ[ツル 「祭る」(動詞)	→	マ[ツリ 「祭り」(名詞)		ハ[シル 「走る」(動詞)	→	ハ[シリ 「走り」(名詞)
■ ノ[ノシル 「罵る」(動詞)	→	ノ[ノシリ 「罵り」(名詞)		ア[ツマル 「集まる」(動詞)	→	ア[ツマリ 「集まり」(名詞)
■ マ[ツル 「祭る」(動詞)	→	マ[ツリ 「祭り」(名詞)		ハ[ズカシメル 「辱める」(動詞)	→	ハ[ズカシメ 「辱め」(名詞)

- 動詞転成名詞の型は、生産的な規則で派生される。
- 動詞転成名詞は動詞の他の語形の型と対立しない。
- 動詞転成名詞が動詞の語形の一部なのならば、名詞の型の空き間を埋めるべきものではない。

31

では、動詞転成名詞の型は他の型と対立するとみなせるのでしょうか。

東京方言の動詞の型の対立数は、語の長さに拘わらず2であり、動詞転成名詞は、生産的な規則によって派生されます。

動詞終止形のアクセント型と動詞転成名詞のアクセント型は異なりますが、これらは規則によって予測可能な情報であるため、対立しません。

動詞転成名詞を動詞の語形の一部とみなせば、名詞の型の空き間を埋めるべきものではないことになります。

動詞転成名詞のアクセント型を名詞のアクセント型として扱ってよいかどうかについては更なる議論が必要でしょう。

まとめ

- 動詞転成名詞を除けば、東京方言の軽音節単純名詞の型の数は最大4。
- 生産的な規則によって派生された、多形態素語の型は対立する型とは必ずしも言えない。
- 多型アクセントとされてきた東京方言にも対立数の上限があるとみなせる。
- 東京方言をN型アクセントとみなすか、「N型・多型」の二分法を改める必要があるだろう。

	0型	1型	2型	3型	4型	5型
1モーラ語 2種	[●] [エ 柄	[●] [エ] 絵				
2モーラ語 3種	○[●] カ[ゼ 風	[●]○ [ソ]ラ 空	○[●] ヤ[マ] 山			
3モーラ語 4種	○[●●] サ[カナ 魚	[●]○○ [イ]ノチ 命	○[●]○ ア[ナ]タ 貴方	○[●●] オ[ト]コ 男		
4モーラ語 5種	○[●●●] ア[メリ]カ アメリカ	[●]○○○ [コ]スモス コスモス	○[●]○○ ム[ラ]サキ 紫	○[●●]○ イ[ノ]シ 猪	○[●●●] ア[ツ]マリ 集まり	
5モーラ語 4種	○[●●●●] ス[ロベ]ニア スロベニア	[●]○○○○ [ファ]クシミリ ファクシミリ	○[●]○○○ ス[タ]ジアム スタジアム	○[●●]○○ ク[リ]スマス クリスマス	○[●●●]○ ×	○[●●●●] ハ[ズカシ]メ 辱め

動詞転成名詞

以上をまとめます。

動詞転成名詞を除けば、東京方言の軽音節単純名詞の型の数は最大4であり、動詞転成名詞を含んでも最大5です。

多形態素名詞の型は単純名詞の型よりもさらに多くなりますが、生産的な規則によって派生された、多形態素語の型は対立する型とは必ずしも言えません。

生産的な規則によって派生された型を除けば、東京方言にも対立数の上限があるとみなせます。

動詞転成名詞を除けば3モーラ名詞の時点で、動詞転成名詞を含んでも4モーラ名詞の時点で、対立数は上限に達しています。

これらのことを受けると、東京方言の分類については、以下の2つの選択肢のいずれかを取る必要があるでしょう。

1つ目は、東京方言をN型アクセントとみなすというものです。対立数が最大4とみなすのならば四型アクセントということになります。

もう1つは、「N型アクセント」・「多型アクセント」の二分法を改めるというものです。

おそらく後者の選択肢を取るべきだと考えます。

まとめ

- 「方言Xに、対立するアクセント型の数はいくつあるか」という問いに答えるのは、必ずしも容易ではない。
 - 「語の長さに応じて対立数が増えていく」多型アクセントと分類されてきた方言(の少なくとも一部)にも、対立数の上限がある。
 - そのような体系を持つ持つ方言は、「対立数が一定数以上に増えていかない」N型アクセント体系を持つ方言と同様に、対立するアクセント型の数を数えることができる。
 - 「N型アクセント」と「多型アクセント」は離散的に区別されるカテゴリーではない可能性が高い。
- 広く受け入れられてきた「N型アクセント」・「多型アクセント」の二分法を超えて、任意の方言のアクセント型の目録とその実現を検討するのが有益である。

以上のように、「ある方言に、対立するアクセント型の数がいくつあるか」という問いに答えることは、一見簡単そうに思われますが、実は必ずしも簡単ではありません。

「語の長さに応じて対立数が増えていく」多型アクセントと分類されてきた方言にも、対立数の上限があります。

そのような体系を持つ持つ方言は、「対立数が一定数以上に増えていかない」N型アクセント体系を持つ方言と同様に、対立数の上限があり、対立するアクセント型の数を数えることができます。


したがって「N型アクセント」と「多型アクセント」の間に明確な線引きはできない可能性が高いと言えます。


つまり、「N型アクセント」と「多型アクセント」は離散的に区別されるカテゴリーではない可能性が高いと言えます。

広く受け入れられてきた「N型アクセント」・「多型アクセント」の二分法を超えて、任意の方言のアクセント型の目録とその実現を検討するほうが、実り多い議論ができそうです。

4. むすび

むすび

 サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」では、日本語・琉球語諸方言の発話レベルの韻律現象（イントネーション）の研究をしていきます。

 イントネーション研究全般、および諸方言の韻律現象に関心のある先生方、ご助言、あるいは共同研究をお願いいたします。

■謝辞

- 本発表の原稿を作成するとき松浦年男さん、セリックケナンさん、松倉昂平さん、山田高明さんに貴重な助言を頂きました。感謝申し上げます。
- 本研究は国立国語研究所第4期共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」およびサブプロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」の助成を受けています。

引用文献

- 秋永一枝(編)(1997)『新明解アクセント辞典』三省堂.
- 平子達也・五十嵐陽介(2016)「佐賀県中南部諸方言の二型アクセントについて」『実践國文學』89: 107-69.
- 平山輝男(編)(1960)『全国アクセント辞典』東京堂.
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, and Tomoyuki Kubo (2018) Tonal Neutralization in the Ikema Dialect of Miyako Ryukyuan. Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, pp. 83-128. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.
- Igarashi, Yosuke and Junko Hirokawa (2022). Corpus of Japanese Telephone Conversation at Hiroshima University: Design and Current Status. *NINJAL Research Papers*, 22, 113-123.
- Labov, William (1994) *Principles of Linguistic Change, vol. 1: Internal Factors*. Oxford: Blackwell.
- 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古(編著)(2012)『日本語アクセント入門』三省堂.
- Michinori Shimoji (ed.) (2022) *An Introduction to the Japonic Languages: Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages*. Brill.
- 仲宗根政善(2011)『沖縄今帰仁方言辞典』角川学芸出版
- 仲間博之・田窪行則・岩崎勝一・五十嵐陽介・中川奈津子(2022)『南琉球宮古語池間方言辞典』国立国語研究所
- 斎藤純男(1997)『日本語音声学入門』三省堂.
- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」杉藤美代子(編)『講座日本語と日本語教育2: 日本語の音声・音韻(上)』, pp. 178-205. 明治書院.
- 上野善道(1997)「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子(監)、国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫(編)『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』pp. 231-270. 東京: 三省堂.
- Zendo Uwano (2012) Three types of accent kernels in Japanese, *Lingua* 122(13),1415-1440.

要旨

- 本発表では、プロジェクトで刊行を予定している日本語・琉球語諸方言の韻律体系をまとめた書籍を紹介し、諸方言の韻律体系を記述する際に直面する「アクセント型の対立数」の数を巡る諸問題を論じる。
- 日本語学で影響力のある枠組みでは、諸方言の韻律体系を「N型アクセント」と「多型アクセント」とに二分する。この2つのカテゴリーは「対立数が語の長さに依存するか否か」と「対立数に上限があるか否か」という2つのパラメータで冗長に定義されている。最初のパラメータは本来不要である。なぜならば、対立数が語の長さに依存しないN型アクセントと分類されてきた体系の中には、対立数が語の長さに依存するものがあるからである。2つのカテゴリーの本質的な差異は「対立数の増加の上限の有無」にあると考えられる。
- 「多型アクセント」には対立数の上限がないのであろうか。従来の研究では、語の音節構造と語形成とを十分に考慮せずに対立数を数えているという問題がある。音節構造と語形成の一方あるいは双方が異なる環境に相補的に現れる型は対立するとはみなせない。音節構造と語形成という2つの要因を考慮して、多型アクセントとされる東京方言を分析すると、対立数は4あるいは5で上限に達するとみなしうることが明らかになる。
- したがって、これまで広く受け入れられてきた「N型アクセント」と「多型アクセント」の間に明確な境界を引くことは不可能である可能性が高い。